

神戸・倚松庵

朝から本降りになった。神戸市東灘区。流れが速くなった住吉川に沿って松並木を歩く。前庭に植わった松の木に隠れるようにたまたま木造2階建ての和洋折衷住宅が目に入る。

倚松庵。谷崎潤一郎が3度目の結婚を迎えた妻、松子と、1936年から7年間過ごした。妻の名を冠して「松」よりかかる住まいと名付けたと聞くと、春雨にぬれる瓦もいごかなまめかし、ステンドグラスの扉を開き、板張りの応接間に入る。半円形の間接照明が室内の陰影を際立たせて。夫妻のささきき声が聞こえてくるようだ。



四季を織り交ぜながら、戦前の富裕層の暮らしを優雅に描いたこの作品で、異彩を放つ一書がある。△一面に茫々たる濁流の海で、山の方から大きな波が逆捲きつつ折り重なる高きで寄せて来て、いろい로운物を下流へ押し流して、いる人が畳の上に乗ったり木の枝に掴まったりして助けを呼びながら流れて行く(略)▽

38年、神戸・阪神間を豪雨が襲い、死者・行方不明者が約700人上った阪神大水害。たつみ教授は「日本人作家としては珍しいくらい雨を書かなかつた谷崎が唯一、じつくり描いた場面」と話す。当時、倚松庵にもつて難を逃

れた谷崎は、2、3時間後には被災地を歩き回った。△住吉川がすっかり干上がったしまつて、川の水が全部甲南市場から波多さんの前を通つてある広い道路を海へ向つて流れてをり、こが川筋になつたやうな状態で△います▽書き残した手紙から、谷崎の興奮が伝わる。

その後、谷崎は被災児童の作文を取り寄せている。創作の下敷きにしたとされる「阪神水害記念帳」。自宅に戻ると、家が跡形もなくなり、家族全員が行方不明になつた小学3年男児は八重におそろしいまるで夢かうつゝのやうな気がする▽とつづつている。



阪神大水害で川の水があふれ出した住宅地 (神戸市提供)

こうした現場取材と文献調査を重ねた谷崎は、一文一文が息の長い独特の文体で、災害現場を生々しく描き出した。

元NHK解説委員で、防災意識の啓発に取り組んできたNPO防災情報機構の伊藤和明会長は「時代を超える谷崎文学を通して、豪雨の恐ろしさも次の世代に伝わったと言える。防災意識を高めるのにも役立つのではないかと指摘する。」



芦屋市谷崎潤一郎記念館 (兵庫県芦屋市伊勢町12の15)で6月26日まで開催している春の特別展「四姉妹の昭和よみがえる『細雪』の世界」で展示中

災害耐えた細雪の家



メモ 倚松庵 (神戸市東灘区住吉東町1の6の50)は1929年建築。引っ越し魔の谷崎が関西で最も長く住んだ。87年に神戸市に寄贈され、90年に北へ150m移築された。開館時間は土・日曜午前10時～午後4時、入館無料。阪神魚崎駅から北へ徒歩約6分。阪神大水害を耐え、45年の阪神大空襲、95年の阪神大震災でも大きな被害を受けなかった。

小説では、大水害で四女・妙子は九死に一生を得るが、その後の悲劇的な結末への序章ともなる物語の「仕掛け」になっている。関西に移住するきっかけになった関東大震災さえ、ほとんど小説に描いてこなかった谷崎が、「細雪」で、その世界の対極にある阪神大水害を登場させたのはなぜか。95年の阪神大震災で被災したたつみ教授は言う。「震災直後、がれきの町に咲いた桜の美しかったこと。『細雪』の美を描くには、逆に災害の壮絶さが必要だったのでしょう」(沢野未来)

関東大震災に遭遇した文豪・谷崎潤一郎が関西に移住したのは1923年(大正12年)。生まれ故郷の東京とは異なる気候、こぼはそして、女性たち。新たな出会いが、数々の傑作を生み出した。神戸、大阪、京都、芦屋……。関西に残る谷崎の足跡をたどる。

間接照明が下がる洋風の応接間。「細雪」にも登場する(神戸市東灘区)